

書評

藤井讓治著『幕藩領主の権力構造』

(岩波書店刊、二〇〇二年)

遠藤 ゆり子

本書は、幕府―藩関係を検討することで、近世における権力構造が確立していく動向を追究したものである。次に本書の構成を掲げる(括弧内は初出年)。

序

第一部 大名と将軍 ―幕藩関係論

I 豊臣体制と秋田氏の領国支配―幕藩権力成立の前提(一九七二)／II 幕藩体制初期の藩財政―譜代大名酒井氏小浜藩(一九七三)／III 幕藩制領主論(一九七四)／IV 譜代藩政成立の様相―酒井氏小浜藩(一九七五)

第二部 幕府法令と藩

V 幕藩制前期の藩令―酒造制限令を素材に(一九七六)／VI 元禄宝永期の幕令―「仰出之留」を素材に

(一九七六)／VII 江戸幕府寛文期の枡統制(一九七九)／VIII 秤座・枡座における東西分掌体制の成立(一九七九)／IX 寛文以前の江戸枡について(一九七九)／X 大名城郭普請許可制について(一九九〇)

第三部「公儀」国家

XI 家綱政権論(一九八〇)／XII 幕藩権力分析についての覚書(一九八二)／XIII 幕藩官僚制論(一九八五)／XIV 日本近世社会における武家の官位(一九八九)／XV 近世「公方」論(一九九五)／XVI 「公儀」国家の形成(一九九四)

以上のように、本書は、幕藩体制の集権性と分権性の総合的理解を目指し、幕藩権力成⽴期における藩と幕府との相互関係を論じた第一部。幕法令の藩への浸透状況を考察し、幕藩体制の確立動向を追った第二部。官僚制や将軍Ⅱ公方の確立期、藩公儀・幕府公儀の形成過程を追った第三部、から成る。主な特徴としては、大枠を創り、通説化している従来の研究を史料から詳細に問い直し、政治機構・組織が整っていく過程を動態的に描き出したこと。また、自立的権力間の相互関係から、権力の特質を追究する議論を提示し、幕藩編成論を展開したこと、があげられよう。研究史上高く評価されるべき成果と思う。だが、氏の眼目は、幕府・将軍の意図する政策・法が、藩へいつから浸透

するかを考察し、それを指標として幕藩権力の確立時期を究明することにある。しかし、そもそも政策・法とは、幕府や將軍の志向性のみによつて発せられるものなのだろうか。

氏は、近世初期の小浜藩財政を考察したⅡ章で、幕閣重臣支配の意味を幕府の譜代藩拡大志向と位置付ける。だが、「余方はともかく、我等知行所では一人として飢え殺すわけにいかない」との酒井忠勝の弁は(69頁)、藩の支出が夫食貸、種貸、施粥、井・堤・川除普請に多く当てられたとの指摘を踏まえると、飢饉状況への対応策であつたとも考えられる。また、Ⅶ章では京枅が全国的量制基準枅として機能していたが故に、京枅が公定枅化したことが指摘されている。氏は、これを全国的流通の円滑化を目指す、幕府の経済政策が一応達せられたものと評価する。だがこれは、流通の場における枅使用の実態が先ずあり、幕府はそれを追認したに過ぎない。つまり幕令が、幕府の志向性から発せられたと理解できない事例の検出である、と考えられる。そしてⅧ章では、秤座・枅座の幕府による東西分掌体制が、各座の相論の末、両座の妥協策として成立をみたことが指摘される。ここでの氏の眼目は、同体制の確立時期の確定にある。しかし、この実証は、幕府を頂点とする政治・経済的体制が、実態を承認した結果成立し、かつそれによつ

て両座の秩序維持が保たれたこと、秩序維持機能を果たし得たところに、幕府の存在意義があつたこと、を明確に示す事例と思う。さらに、寛永期の酒造制限令が、地域によつて内容を異にし、万治以降は幕令が藩令にそのまま反映されるとの指摘も興味深い(Ⅴ章)。氏はこの違いとは、寛永期迄のそれが將軍―大名の主従制的性格を、万治以降は將軍(幕府)が全国・全階層の公儀的性格を帯びるようになったことを、それぞれ示すという。だが、寛永期迄の同法令内容が飢饉対策と考えられることから、地域ごとの飢饉状況への対応の相違を反映したものと解する余地があろう。幕府による大名城郭普請許可制が寛永期に受容されたことも、氏は幕府・將軍による軍事力掌握の結果と結論づける(Ⅹ章)。しかし問題は、なぜそれが受容されたのか、である。寛永期には、戦争状況の恒常化が克服され、一定程度の平和が社会に浸透していた。そのような社会状況を背景にするとも考えられる。要するに、幕府の政策・法とは、社会的要請に規定されたものではなかつたのだろうか。

本書の研究成果からはむしろ、氏の権力認識、即ち権力とは既にそこにあつて、我々と対峙する「闘うべき相手」(あとがき)とは、異なる権力理解が得られたように思われる。各章で検証されたように、幕藩領主による支配構造が、寛永期頃を画期として確立していったことは確かであろう。

藤井讓治著『幕藩領主の権力構造』（遠藤）

だが、この時期に官僚制をはじめとした支配体制が形成されていったのも、この頃に社会秩序が安定化していく動向と不可分ではないのではないか。なぜ、その政策・法・政治体制が必要とされたのか。本書の成果に学び、その様な観点から、幕府・藩研究は今後展開されるべきと思う。

以上、率直に私見を述べさせて頂いたが、評者の誤読、曲解もあると思う。切に御寛恕を請う次第である。

（本学博士課程後期課程）